

教養小説『三太郎の日記』における読書の意義

——内面的道徳としての自己探求と、社会との相克

基礎教育学コース 松井 健人

Meaning of Reading in *Santaro's Diary*

Kento MATSUI

This paper aims to offer an insight into the meaning of reading in Bildungsroman *Santaro's Diary*, written by Jiro Abe. Scholars have mainly studied *Santaro's Diary* through its reception among readers and the influence it had on students of later generations. Above all, this Bildungsroman has been considered as the principal main cause that, which brought about the boom of indiscriminate reading of western classical books in the Taisho Era. More recent studies have revealed that such a statement was based mostly on the reception of the book, rather than its content. Despite this, however, what it meant to read in *Santaro's Diary* remains unclear. Therefore, in this paper, I am going to show that the reading of Santaro has important function as an art of self-inquiry. Moreover, the limit of the act of reading as self-inquiry will be clarified.

目次

- 1 はじめに
- 2 先行研究：『三太郎の日記』における読書を巡って
 - A 『三太郎の日記』と教養：唐木順三の「型の喪失」を巡る課題
 - B 『三太郎の日記』における読書
 - C 小括
- 3 『三太郎の日記』における読書の意義
 - A 自己探求の手段としての読書
 - B 内面的道徳としての読書の規範化
- 4 相克する「社会」と「読書」
- 5 おわりに

1 はじめに

本稿の目的は、大正教養主義を代表する教養小説『三太郎の日記』における読書行為の意義を、とくに自己探求という観点から明らかにすることである。従来、「あれもこれも (sowohl als auch)」という言葉に代表される形で捉えられることの多かった『三太郎の日記』の読書行為に対する理解に対して、単なる西洋古典の接収にとどまらない読書行為の意義、ひいては『三太郎の日記』で展開される自己探求と結びついた読書行為の意義とその成立基盤そして限界、という諸側面を作品内在的に示す試みである。

本稿が試みる自己探求という分析視点は、『三太郎の日記』が、教養小説として受容されてきた経緯を考えれば、教育学としての意義を持つものであるといえる。『三太郎の日記』は、当時の大正時代に限らず昭和前半期においても、教養主義を代表するバイブルとして多くの学生に読まれてきた¹⁾。必ずしも一貫した話の筋を構成するわけではない『三太郎の日記』であるが、その特徴として「弱者の哲学」、「抽象言語の愛好」、「観想の立場」、「内省主義」、「内面道徳の主張」など、さまざまな特徴が指摘されてきた²⁾。その特徴のなかでもとくに際立ったものとして、主人公・青田三太郎の行う読書行為が指摘できる。主人公である三太郎が、作中でさまざまな読書を行い、読書に自己探求を求めたように、後の世代も『三太郎の日記』の読書をとおして自己探求を行っていった³⁾。このような読書を通じた自己探求という枠組みが、教養小説『三太郎の日記』にはある。文学作品とくに教養小説が、書かれている経験のなかへ自己投射することによる、期待的社会化としての機能を持っていることを考えれば、教養小説とは、読者の社会化を促す教育的装置として捉えることも可能である⁴⁾。つまり、『三太郎の日記』は、教育的装置としての側面を持ち、後世の読書文化に影響を与えるものであったとみなすことができる⁵⁾。

それ故に、本稿の考察の対象は、阿部次郎の作品の

中でも特権的な地位を占める、教養小説として受容された『三太郎の日記』であり、とくにその作品における読書行為の意義の内的編成である。

とはいえ、『三太郎の日記』に関して積み上げられた研究は数多い。また「教養」「教養主義」など、この主題を論じるための語句そのものもまた、一意の意義を持つ語句として確定させることは困難である。

よって、屋上屋を架すことを避けるため、本稿の第二節において、『三太郎の日記』を巡る研究史を概観する。その際、『三太郎の日記』研究ひいては教養主義研究においてとくに大きな影響を与えた唐木順三の解釈枠組みと、それに対する先行研究の応答を確認する。その上で、『三太郎の日記』における読書の意義について述べた諸研究から、『三太郎の日記』における読書に対して与えられた位相を明らかにする。そして、第三節では、読書の意義が、『三太郎の日記』において如何に与えられていたのかを作品内在的に明らかにし、さらに読書行為がどのように正当化されていたのかを示す。最後に、第四節にて、読書と実社会とが相克する緊張関係を作品より再構成する。

2 先行研究：『三太郎の日記』における読書を巡って

A 『三太郎の日記』と教養：唐木順三の「型の喪失」を巡る課題

まず、『三太郎の日記』に関して定説ともいえる先行研究が、唐木順三『現代史への試み』における大正期教養派批判である。唐木は「型の喪失」という観点から、型を持つ明治期の修養と、型を喪失し自己の内面に閉じこもる大正期の教養とを対比的に論じ、大正期教養派の読書行為を批判的に論じた。

唐木は「一つの理想、一つの古典を選ぶということ」をせず、古典と通称されているさまざまの花から、さまざまな蜜をあつめることが教養というものだとされた」として教養派の濫読を繰り返し批判する⁶⁾。唐木によれば大正期教養派は大正 6、7 年に 30 歳前後であった世代である。また、教養派に対しては、社会的基盤をもたない小市民の自己優越と自己逃避という社会的基盤が指摘される⁷⁾。彼ら教養派における型の喪失は、端的には「幼時あるいは少年時にその柔軟な骨格を方に形成する規範が無くなっていた」ために起こった⁸⁾。

唐木によれば、教養派における型の喪失が如実に顕れるのが、その読書形態においてである。唐木は、教

養と行為が密接に接合していたギリシアの教養を範例とし、「声をたてて読むこと、動作をともなって読むこと、そうして「本」に心酔すること」を、型を持った教養読書とみなした⁹⁾。これに対して型の喪失は、大正時代において、読書が黙読化し、読書の場所が私的親密圏である書齋に移った時、すなわち明治期までの読書のありようが変容した際に起こった、と指摘する¹⁰⁾。

このように、唐木にとって重要なのは、身体的な読書（音読・動作を伴った読書）によって古典を享受し、自己形成を図ることであった¹¹⁾。

では、この「型」とは唐木にとっては何を意味していたのか。研究史において唐木の研究はたびたび参照されながらも、その「型」について内在的な考察はあまりなされてこなかった¹²⁾。本稿で唐木の「型」の意味内容・意義を論じるだけの余力はないが、あえて付言すれば、唐木における「型」が志向する方向性とは、実存それ自身に向かうための方策である。大正期教養派は、型を喪失しただひたすら古今東西の古典の読書（黙読）に徹したが、それでは実存の孤独、単独の存在者としての個人、というものに向き合えきれなかった（この意味で芥川龍之介が大正期教養派の典型となる）。つまり、「近代人の無性格、形と型の喪失は単純な過程によっては再建されない。即ち内在論、あるいは内在的超越の立場ではそれを果たしえないという体験、自己を実存の単独者として自覚せざるをえない情況、それが例外者のものでないといふことのうちに、我々の問題がある」のであった¹³⁾。

以上のような唐木の研究は、「型の喪失」という明確なテーゼを打ち出している特徴もあり、教養主義研究においてたびたび引用され、定説化されていった。しかし、この唐木の枠組みは、近年の研究により乗り越えられつつある。唐木への重要な指摘として、小室弘樹と田中祐介の研究をあげることができる。まず小室は、唐木がその「型の喪失」を言及するにおいて題材とする阿部次郎『三太郎の日記』を詳細に論じ、唐木が批判した「型の喪失」がそもそも『三太郎の日記』において当てはまらないと主張した。つまり、唐木は昭和前期以降の教養「書」主義の源泉として『三太郎の日記』を読んだために、『三太郎の日記』における型への追求の意志を見逃した、とされる¹⁴⁾。また、田中祐介は唐木の「型の喪失」を、大正教養主義と昭和期の教養主義までを同一視したうえで批判していると指摘している¹⁵⁾。このように、『三太郎の日記』における読書行為は、唐木のように「型の喪失」だけでは

とらえきれない広がりを持つものであった。

B 『三太郎の日記』における読書

前項では、『三太郎の日記』への解釈の在り方に大きな影響を及ぼしてきた唐木順三の「型の喪失」説を巡る研究史を概観した。この概観をとおして踏まえるべき点は、『三太郎の日記』における読書行為と、『三太郎の日記』の受容をとおして形成された読書文化である教養書主義とを区別しなくてはならない点である¹⁶⁾。

本稿は、前者を問う。すなわち、『三太郎の日記』における読書の位相を内在的に問う。本項では、『三太郎の日記』における読書が先行研究ではどのように位置づけられてきたのかを明らかにする。

従来の研究において、以下の文章群が、『三太郎の日記』の読書姿勢を如実に表すものとして繰り返し参照されてきた。

俺はホメーヤやソフォクレスやヨブやダビデや基督や、ポーロや、聖オーガスティンや聖フランシスや、ダンテやゲーテを精神上の祖先に持つことを愧ぢない¹⁷⁾

基督に、ダンテに、ゲーテに、ルソーに、カントに求むることについて何の躊躇を感ずる義務をも持つてゐない¹⁸⁾

ニーチェがトルストイを悪く云つたり、トルストイがニーチェを悪く云つたりすることは、俺がニーチェとトルストイと両方の弟子であることを妨げない。(略) もし又彼らが相互に反撥するのはその間に深い本質的の矛盾があるためにしても、俺が彼と此との弟子であるには何の妨げともならない。俺の人格は俺の人格で、彼らの人格ではないからである¹⁹⁾

三太郎の読書行為について、とくにニーチェとトルストイの双方を師とする三太郎の読書態度が考察の遡上にのせられた。三太郎は様々な書物を読破することで、彼自身の思想を固有なものにする総合的真理を会得することができると思つたのである、と捉えられた。しかし、このような読書への態度は、「実社会とは切り離された読書と思索の内面生活にのみ関わることであった」として評される²⁰⁾。

このように、『三太郎の日記』における読書とは、これまでの研究では、「自己の体験を深める方法とし

て、人類の教師というべき古人の書籍に向かう」態度である²¹⁾とされ、数多くの古典を「あれもこれも(sowohl als auch)²²⁾」と読んでいく内面志向的な態度であると位置づけられることが多かった。このような読書態度に対しては、前述の唐木に代表されるように繰り返し批判の対象となってきた。また、『三太郎の日記』が大正期の教養主義を代表する書物として受容されてきた故に、教養主義とは、西洋古典を中心とした文学、哲学、芸術を「あれもこれも」といった形での摂取であると理解されてきた。大正期教養派と読書について、助川徳是は、「我を最高の価値たるものとして捉え、内観によって自我の求深の要求を明らかにし、その要求を満たすべき実在を読書と思索によって探り、この実在と融合一致すべく努めることによって理想的人格に達しよう」とするものであったと述べ、読書と結びついた内省志向を指摘する²³⁾。このように、『三太郎の日記』と同時代の大正期教養派の読書は、一般的に自己探究を目指しながら読書を行うものであったと示される。

C 小括

ここで小括を行うと、これまでの二項で明らかにしたように、『三太郎の日記』における読書に対しては、大きく二通りの解釈がなされてきたといえる。一つは、唐木が示すように「あれもこれも」といった西洋古典書物の無節操な濫読を中心とした読書態度である。そして二つめが、自己探求を中心的課題とし、その課題達成のための手段としての読書、という捉え方である。

既に小室弘毅、田中祐介や竹内洋が指摘するように、前者の捉え方は、「学生叢書」に代表されるような教養書主義の影響の起点として『三太郎の日記』を見いだすものである。しかし、あくまで『三太郎の日記』に内在的に読書の意義を読み解いていくなれば、『三太郎の日記』を、古典の摂取をもっぱらとする読書態度の始祖として外挿的に設定する解釈は誤っているといえるだろう²⁴⁾。

これらを踏まえて田中祐介は、『三太郎の日記』における思考様式を、〈自己〉の探究と〈人格〉の完成、そして〈普遍〉の実現を目指すという、〈自己〉〈人格〉〈普遍〉の三点に見出す²⁵⁾。田中が指摘した読書と生活、読書と自己探求との連関に、本稿はより着目し、さらにその内的正当化の在り方を考察する。つまり、本稿は読書行為に託された自己探求の様相、とくに、読書による自己探求という行為の正当化の様相を明ら

かにするものである。では、『三太郎の日記』において実際にどのように読書行為に意義づけがなされており、読書の目的は何であるのか。この課題を次節において扱い考察を行う。

3 『三太郎の日記』における読書の意義

A 自己探求の手段としての読書

それでは、三太郎が読書を通じて目指そうとしたものは何であったのか。まずは、率直に吐露される三太郎の希望を見よう。

社會を嫌悪するは余が生活の一面にすぎない、社會と隔離するは余が欲求の一面にすぎない。人類を嘲笑するは余が感情の一面にすぎない。眞正の希望は社會と融和し人類と親愛したいのである。自然と社會と自己と、三面協和するにあらざれば吾人の生活はつひに全きを得ない。一切を抱擁する底知れる心を思うとき、余が心は羞恥と憧憬とに踊る²⁶⁾

上の引用にあるように、三太郎が目指すものは、「自然と社會と自己と、三面協和する」ことである。あるいは別の言い方では、以下のように、「本当の生活」とも表明される。

僕は新しくても古くてもいいからたゞ本當の生活をしたいのだ。本當の生活ができるやうにいろいろな人から導いて貰ひたいのだ。僕は昔の人の本を読んで、自分と同じ思想に邂逅ふ事は數限りもない。(略)偉い人と同じ事を考へたのは俺の名誉だと考へると、喜ばしい、心強い氣になつて、自分の古い事に感謝するのだ²⁷⁾

さしあたって、三太郎の目標は「自然と社會と自己と、三面協和する」「本当の生活」であると言えるだろう。そして、上記のように、この目標を達成するプロセスに、読書行為が関わってくることとなる。読書することの意義について、三太郎は次のように述べる。

何のために書を読むか。知らないのが口惜しいから読む。商賣だから読む。現在の楽しみを求めするために読む。自分の生活の基礎を拵へるつもりで読む。読んで行きながら、書中の問題又は書中の世界に同化するは何の用ぞと思ふ。ある部分は自

分自身の問題に心奪はれながら上の空で読む。ある部分は書中の問題に同化せむと努力するために自分の問題を殺してゐることを意識しながら苦しみ読む。自分の問題と書中の問題とピタリと呼吸が逢ふことを感じながら、先を楽しんで読むことは頗る稀である。まして全編を通じて呼吸の一致を感じ通すことなどはほとんどない。かくて自分はなかなか本が讀めないのである²⁸⁾

つまり、『三太郎の日記』においては、読むこと、読書は「自分の生活の基礎を拵える」あるいは「自分の問題」に対するために行われる。先行研究でも、読書行為が自己の内省的な側面に関わるかぎりにおいて評価されるという点は、既に指摘されてきた²⁹⁾。三太郎の読書は、自分の問題を本の中に見出すために行われる。次の文章には、読書を行うための問題意識が鮮明に表されている。

俺は本を讀みながら、自分の要求にピタリとあてはまらない憾を感じる事が多い。俺は本を讀みながら、自分の問題の焦點に触れてもらえない歯痒さにイライラする。さうしてつひに讀書の生活を輕蔑してしまう。しかし純粹に、單獨に、自分の問題に深入りしようとする、いくばくもなく、俺の思想は散漫になり、統御を失ひ、連絡を失つて、つひに行衛不明になつてしまふ事が多い。さうして俺は新しく讀書の恩恵に感謝する³⁰⁾

三太郎にとって本を読むことは、自分の問題を見いだす、自分の問題に應ずるために行われる。ここでは読書は、自分の思想を統御し、連絡をつけることが主要な目的となる。こうして『三太郎の日記』において記された読書の意義を見ていくと、古典の撰取というよりは、「自分の問題」にどう応じていくのか、自己探求の問題圏に引き寄せられていく。

書を読むとは、自ら生きることを停止することを意味するならば、又他人の著作を研究するとは自ら省ることを中断することを意味するならば、我らはもとよりいかなる場合にも、書を読むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。こゝに読書と云い研究と云い、師につくと云ふは、自ら生き、自ら省るための一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある³¹⁾ (強調原文)

引用の前半部ですでに示されるように、唐木が批判したような「あれもこれも」の読書は、三太郎が目指すところではなかった。そうではなくて、「自分の問題」に向き合い「生活」を送る事、これこそが三太郎の目標であった。その目標にあたって、読むこと・読書とはあくまで「自分の問題」にむきあい、思考の糧とするための手段であった。そして、三太郎の読書は、以下のように三太郎自身の思想に反映されていく。

俺は一つの問題を考へる時には、その時俺の頭に在る一切の記憶を遠慮せずに思索の材料に使用する。さうしてその中から最も適当な表現の手段を選択して自分の思想に形を與へる。したがつて俺の文章の背後には常に俺の読書の全量がある。俺は俺自身の思想として消化した以外の事は云はないつもりだから、自分の云ふことの一々を誰彼の説と比較したり参照したりする必要を感じない³²⁾

このように、三太郎にとって読書は、あくまでも「本当の生活」という目標のために手段であり、これによって自分自身の思考を整理することが重要なのであった。ただ、この三太郎の目標は、すでに見たように「本当の生活」や「自然と社会と自己と、三面協和する」など様々な文言で言い表されるものの、いずれも自己の在り方を問う、自己探求としての側面を持ち合わせるものであった。では、本稿ではさらに「本当の生活」、「社会・自然・自己との協和」あるいは「自分の問題」として様々に示されてきた三太郎の読書の目標は、どのように正当化されるのか、その内面的論理を明らかにする。

B 内面的道徳としての読書の規範化

前項では、読書行為をとおした到達目標として、三太郎が「本当の生活」や「社会・自然・自己との調和」を掲げていたことが明らかになった。では、この三太郎の読書目標が、どのように正当化されているのか。ここで、三太郎が主張する「内面的道徳³³⁾」を見る必要がある。

自分にとっては自明なことでも社会にとっては自明でないことがある。自分にとって自明なことと、社会にとっては自明でないことと——この二つが永久に並存して相互に關係しないものならば問題はない。併し社会は社会自らにとって自明ならぬこ

とはすべて許す可からざることと推定する。個人にとつて自明にして、社会にとつて自明ならぬ場合に、個人が自己にとつて自明なる道を進まむとすれば、社会はこれに干渉し、社会はこれを壓迫する。こゝに於いて個人は自明の道を進まむがために社会と戦ふ必要を生ずる。自らのために云ふ必要なくして、社会のために云はなければならぬ必要に逢着する。自分はこれに名づけて啓蒙言と云ふ。内面的道徳の説は自分の啓蒙言である³⁴⁾

ここで三太郎が導入するのが「外面」と「内面」の二分法であり、これによって、自分にとって自明であるが社会にとって自明でないことを支える枠組み（道徳）を得ることになる。そして、必然的に、社会と対抗関係、つまり内面と外面の二項対立図式も生み出されることになる。さらに三太郎は以下のように述べる。

しかし内面生活に生きることを知る者にもまた道徳がある。道徳は精神的價値の世界に緊張と威嚴と「眞實」とを與へる。内面生活を支配する道徳は法律書生の、檢察官の道徳とは全然別様の基礎の上に聳える。いかに行爲すべきかは今や枝葉の問題となる。いかなる態度に心を置くべきか、いかに精神を闊歩せしむべきか、これが最高關心の問題である³⁵⁾

内面的道徳として、自己の内面に向かいあう事を正当化し、実社会の問題を外面として位置付ける。それによって、「たゞ本當の生活をしたい³⁶⁾」という純粋な動機からなる三太郎の希望は、内面的道徳において崇高なるものとして位置づくことになり、同時に最高度の關心を持って臨むべきものとなる。そして、そのような内面的道徳によって正当化された読書行為は次第に、内面志向・社会逃避の様相を帯びることになる。例えば、理想の生活様式を記した「夢想の家」においてその様相が展開される。

ゆゑに夢想の家の各室は相互の孤獨を十分に尊敬することをもつて理想とする。主要なる室には必ず次の間がある。次の間と廊下との境には重い扉があつて内から鍵をかけるやうに設備されてある。夢想の家に住む者は重い扉と次の間とを隔てて廊下の遠い音を聴きながら、外界の闖入を防禦したる石造の室にあつて讀書し思案し戀愛するのである。眞正の孤獨と閑寂とを領して魂の眼を内

に向けるのである³⁷⁾

上の引用から明らかなように、三太郎の読書行為を経て到達するはずの「本当の生活」とは裏腹に、三太郎が「夢の家」で構想する生活は、自己の内面に引きこもるものであるかのような様相を呈する。では、つまるところ互いに入り乱れあう読書、生活、社会の三者は、三太郎にとってどのようなものとして位置づくものであるのか。この点を次節で明らかにし、『三太郎の日記』における読書の意義を明らかにしたい。

4 相克する「社会」と「読書」

前節では、『三太郎の日記』において、読書が三太郎の「自分の問題」を発見し、「本当の生活」を送るための手段として捉えられていることを明らかにした。さらにこの読書を通じた自己探究が、内面的道徳として正当化される構造を確認した。

さらに、「生活」の意味内容をより具体的に明らかにしなくてはならない。「生活」とは一体何であるのか。作品冒頭部において展開される以下の文章は、『三太郎の日記』において数少ない求めるべき「生活」と実体験が結び付けられて語られたものとなる。

俺にも昔は真正の生活があつた。幼き日は全心にしみ渡る恐怖と悲哀と寂寞と、歡喜と争心と親愛との間に過ぎた。俺は子供として又人として、無花果の嫩葉が延びるやうに純一無難に生きて来た。俺の心は一方にすくすくと延びて行く命であつた。一方には又靜かにさわやかなる鏡であつた。命が傷ついて鏡が曇つて、こゝに動亂を本體とする現在が来る。明日になつては命が枯れるか鏡が碎けるか、現在の俺には何事もわからない。唯俺には満足し得ざる現在がある、現在に満足せざる焦躁がある³⁸⁾

三太郎は「真正の生活」を過去に結び付け、内面の形成とその平安をその特徴として述べる。しかし、その「真正の生活」を、単なる過去への憧憬とを区別することは困難である。一方、現在の状況について、彼は「生活」を追求することの困難を吐露する。

解決されぬ儘に何時の間にか意識の闇に葬られてゐた問題は、幾度目かに又俺の心に蘇つて来た。生活と生存と——真正に生きることと食ふ爲めに

働くことと——の矛盾は又俺の心を悩まし始めた³⁹⁾

生活つまり「真正に生きること」の対立項は、生存つまり「食うために働くこと」であった。つまり、三太郎の目的であった「真正の生活」に対して、「食うために働くこと」すなわち労働が示されるのである。また、三太郎の生活と社会との板挟みは、以下のように展開される。

しかしこの創造は職業を棄てたる専念を要求する。さうしていつまでかゝると云ふ時間の豫約をして呉れない。しかるに俺は貧乏人である。俺には借金があつても貯金はない、労働をやめると共に俺は食料に窮する。のみならず病弱の母は薬餌の料に窮し、知識の渴望に輝く弟は學資に窮する。俺の創造は、俺の真正の生活は、俺の今に迫る内部の必然は、俺の生存と矛盾する。母の健康と矛盾する。弟の前途と矛盾する。飛躍を要求する魂と、魂の翼を束縛する骨肉の愛と——俺はこの矛盾をどうすればいいのだらう⁴⁰⁾

精神の高貴を要求する内面的道徳の要求と、金銭的困窮につまる実生活が矛盾する。実際、阿部次郎は、大学卒業後、仕送りを受けて「朝日文芸欄」に執筆する以外はほとんど仕事をせず、いわゆる高等遊民として暮らしていた⁴¹⁾。とはいえその暮らしぶりは余裕あるものではなく、大正四年に『三太郎の日記 第貳』を刊行した当時においても、生活の資金繰りに苦慮していた⁴²⁾。

しかし、経済的状況の苦しさに直接対処する方策は『三太郎の日記』では展開されない。記されるのは、以下にあるような、ただひたすら内面への省察である。

お前の生活には何と云つてもまだ内容が足りない。文明史的の意味においても、現實的の意味においても。現實的の生活は空しいだらう。しかしお前はまだ碌にその生活を味はつてゐないから、一方にはそれに對する未練があるし、一方にはそれを厭ふ心持が濃厚でない。それだから善にしろ悪にしろそれから来る刺戟をいきいきと受取ることが出来ないのだ。Experiment の態度でもいいから、もつと戀愛と歡樂と迷ひとをあさつて見ろ。(略)本を讀むこと、身慄ひの出るやうな恍惚をさがしに行くこと、さうしながら自分の考へをおしつめて行くこと、考への本當に熟した時に熟果

の墜ちるやうに文章をポトリポトリとおとして行くこと——何と云ふ楽しい生活の夢だらう⁴³⁾

「社会」「自然」「自己」の三者の調和は、三太郎の目指すものの一つであった。しかし、結局追求されるのはあくまでも「自己」への内省である。それは、以下の「社会」を論じる文章の中に、いやおうがなく見出される内省への高評価に典型的である。

要するに、自己と社会との関係を主として見る時、自分は三種の生活を見る。第一は社会の子としての生活。第二は求道者としての生活。第三は廣義に於ける傳道者としての生活。第一の生活において、社会と自己との関係は、最も同一と呼ばれる関係に近い。第二の生活においては、自己はその本質において超社会的である。第三の生活においては、社会と自己とは相求め相反撥する。それは男と女との如く、対立として最も緊密なる交渉を保持する。これら三種の生活は固より相錯綜し相交互する。しかし生活様式の焦點に着目する時、人はこの三種の生活の差別を見誤ることが出来ない⁴⁴⁾ (強調原文)

『三太郎の日記』においては、協和されるはずの社会は、結局は自己の内省と対立する「外面」であり続ける。そしてその関係は解消されないままに、三太郎は以下のように、「生存のための関心」をただ除外することによって、自己の目標とする生活へ向かおうとする。

俺の煩されざる魂の生活は「汝ら明日の糧を想ひ煩ふなかれ」といふ言葉の意味を真正に體得することによつて始まるのだ。この關門を通過するのは容易なことではない。しかし「生存のための関心」をはねのけた力が爾後の生活にとつて無意味にをはる譯はない⁴⁵⁾

三太郎は社会との協和を目標として掲げながらも、「外面」である社会に対して、自己の内面を優位に位置づけざるを得ない。そして、あくまでも自己の内省を支える手段であるはずの読書は、内面である自己と外面である社会との二項対立が解消されないがために、実践的意義を持ちえないのであった。

5 おわりに

本論では、『三太郎の日記』における読書の意義を作

品内在的に明らかにすることを試みた。結果、三太郎はただ闇雲に西洋古典を濫読していたのではなく、「本当の生活」「社会・自然・自己との協和」を達成することを目標として読書を行っており、とくに「自分の問題」を始めとした、自己の内省の支えとなるような書物を読むことに意義が見出されていたことが明らかとなった。つまり、読書は自己探求の手段となる。しかし、社会との協和を目論みながらも、自己の内省を重視するという三太郎の内面的道徳と、内省を支える読書行為は接近し、外面である社会と対立するような様相を呈する。そして、金銭に困窮する三太郎の実生活においては生活（真正に生きること）と生存（食うために働くこと）は矛盾し、その解消はなされないままに、三太郎の内省への決意が表明されるのであった。

大正時代の後、教養主義は、「学生叢書」に見られるように西洋・東洋の古典を収録した読書目録として具現化され、学生の読書文化として根付き、そして崩壊することとなった。竹内洋が指摘するように学生文化としての教養主義は、大衆化と共に崩壊を迎えたとと言えるだろう⁴⁶⁾。

大正期の教養主義は、エリート主義と手を携え、高等教育機関に進学しない大衆的な若者の日常性や労働から遊離した高級な、文化的な世界としてイメージされてきた。教養主義はその意味で、一種の疑似的な階級文化であった⁴⁷⁾。

本論によって明らかになったように、三太郎の実生活への向き合い方は、たしかに堀尾輝久が指摘するように、主観的に実生活と向き合おうとするものであったものの、選択と決断の行為を伴う主体性を持つものではなかった。それゆえに、三太郎の自己探求への試みは、雑多なものへの無限定な関心を示すディレクタントになる危険性と紙一重であった⁴⁸⁾。内面的道徳と結びついた自己探求を目指すための読書行為であったが、その具体的実現の方策は見出されない。ただ、労働を忌避する果てに、読書があたかも目的そのものに転化するような様相を見せる。古今東西の読書を行い、むやみな知識の摂取ではなく自己探求を目指しながらも、「労働」や「現実的生活」が迫ってくるのであった。

教養主義にとっての天敵が就職であったと指摘されるように、教養理念は社会的・経済的背景から完全に自由ではありえない⁴⁹⁾。日本の教養主義の源泉とされる『三太郎の日記』においても、同じである。教養主義の困難（読書を手段とした自己探求の困難）は、すでにその源泉において予告されていたのだ⁵⁰⁾。

【付記】

本稿は、Asian Link of Philosophy of Education (ALPE) (2017年 7月30日・広島大学)における口頭発表 MATSUI Kento 「Meaning of Reading in Modern Japan: Reading and Bildung in *Santarō's Diary*」の原稿を元にし、加筆修正したものである。フロアから頂いた数々のご指摘に感謝申し上げます。

注

- 1) 参照、筒井清忠 1995『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店；竹内洋 2003『教養主義の没落』中央公論新社
また、『三太郎の日記』は、大正三年の東雲堂書店から『三太郎の日記』、大正四年に岩波書店から『三太郎の日記 第貳』、そして合本として大正七年に岩波書店から『合本 三太郎の日記』が出版されるという、三回にわたる刊行を経ている。参照、佐々木靖章 1975「阿部次郎『三太郎の日記』の構成—資料を中心に—」『茨城大学教育学部紀要』、(24), pp. 13-24.
- 2) 上山春平 1960「阿部次郎の思想史的位置—大正教養主義の検討—」『思想』、(429), p. 375.
- 3) 苅部直 2007『移りゆく「教養」』NTT出版、p. 54.
- 4) D・リースマン著、岡田直之訳 1958「精神の火薬」『アメリカーナ』、4(7), pp. 70-73. また、明治以降の近代日本において、人間形成＝陶冶＝教養 (Bildung) に対して読書は大きな役割を果たした。参照、山梨あや 2001「近代化と「読み」の変遷：読書を通じた自己形成の問題」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』、(52), pp. 71-84.
- 5) この教養主義の読書文化としての側面を指摘したものととして、竹内、前掲書を参照。
- 6) 唐木順三 1963『新版 現代史への試み』筑摩書房、p. 33.
- 7) 同上、pp. 37-47.
- 8) 同上、p. 36.
- 9) 同上、p. 49.
- 10) 同上
- 11) 同上、p. 59.
- 12) 唐木の型に関して考察を行った数少ない研究として、西村稔 2000「教養と作法—覚え書 (一)—」『岡山大学法学会雑誌』、49 (3・4), pp. 73-86.
- 13) 唐木、前掲書、p. 111. しかし、ついに唐木は「新なる形式」を発見することは無かった。参照、西村、前掲書、p. 82.
- 14) 小室弘毅 2001「阿部次郎『三太郎の日記』における教養の問題：唐木順三の教養派批判の再検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』、(40), p. 25.
- 15) 田中祐介 2004「思考様式としての大正教養主義—唐木順三による阿部次郎批判の再検討を通じて—」『アジア文化研究』、(30), pp. 58-59.
- 16) 小室は教養書主義の典型例として、『三太郎の日記』も収録する「学生叢書」を指摘する。小室、前掲書、p. 20.
- 17) 『阿部次郎全集 第一巻』角川書店、1960、p. 260. 以下、『三太郎の日記』
- 18) 同上、p. 433.
- 19) 同上、p. 318.
- 20) 渡辺かよ子 1997『近現代日本の教養論 一九三〇年代を中心に』行路社、pp. 45-46.
- 21) 高橋文博 2008「阿部次郎の社会思想 『三太郎の日記』を中心に」『日本の哲学』、(9), p. 61.
- 22) 『三太郎の日記』、p. 394.
- 23) 助川徳是 1984『野上彌生子と大正期教養派』桜楓社、p. 105.
- 24) 竹内洋 2015「教養派知識人の運命—阿部次郎とその時代 4」『ちくま』、(526), p. 35.
- 25) 田中祐介 2009「苦悶の大正教養主義—真理探究と社会改造に揺れる知識階級の社会史—」国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文、p. 37.
- 26) 『三太郎の日記』、p. 61.
- 27) 同上、p. 190.
- 28) 同上、p. 326.
- 29) 田中 2004、pp. 52-55.
- 30) 『三太郎の日記』、p. 248.
- 31) 同上、p. 467.
- 32) 同上、pp. 247-248.
- 33) 内面的道徳の重視は、『三太郎の日記』全体に一貫する重要な観点であった。参照、上山、前掲論文、p. 374.
- 34) 『三太郎の日記』、p. 95.
- 35) 同上、p. 97.
- 36) 同上、p. 190.
- 37) 同上、p. 55.
- 38) 同上、pp. 20-21.
- 39) 同上、p. 99.
- 40) 同上、p. 102.
- 41) 町田祐一 2010『近代日本と「高等遊民」—社会問題化する知識青年層』吉川弘文館、pp. 44-45.
- 42) 竹内洋 2014「教養派知識人の運命—阿部次郎とその時代 3」『ちくま』、(525), p. 19. また阿部次郎の伝記については以下を参照。新関岳雄 1985『影と声 ある阿部次郎伝』深夜叢書社；大平千枝子 2004『阿部次郎とその家族—愛はかなしみを超えて』東北大学出版会
- 43) 『三太郎の日記』、p. 349.
- 44) 同上、p. 371.
- 45) 同上、p. 105.
- 46) 竹内洋 2003、pp. 206-246.
- 47) 北村三子 1999「近代青年と教養—教養主義を越えて—」『教育学研究』、66(3), p. 269.
- 48) 堀尾輝久 1987「戦前における「教養」の存在形態」『天皇制国家と教育—近代日本教育思想史研究—』青木書店、pp. 270-273. 唐木の解釈枠組みにのっとり外在的に堀尾は批判を行う。これに対して本稿が示したのは、『三太郎の日記』における読書の内面的な位置である。
- 49) 高田里恵子 2005『グロテスクな教養』筑摩書房、pp. 105-107.
- 50) しかし、ここで一つの留保をつけることを忘れてはならない。たしかに、主人公・青田三太郎は実際の生活の経済的側面に悩ま

されながら、読書を行い、自己探求を求めた。それは確かに失敗を予感されるものであったかもしれない。とはいえ、木村洋が指摘するように、人生や自己への思索が肯定的に扱われるようになることが可能となった大正期という時代そのものの豊かさを見いだすことは可能である。本稿が示したのは、その豊かさの上になりたつ、自己探求として読書することの困難であった。参照、木村洋 2015『文学熱の時代— 慷慨から煩悶へ』名古屋大学出版会, p. 294.

(指導教員 小玉重夫教授)